

栄を願って、通天閣が再建された一九五六年から毎年開かれ、こととして五十七回目。  
えとにちなんだ本物の動物同士が引き継ぎをするのが恒例。「辰」の代表としてタツノオトシゴのポット、ペリシーホースから、「巳」の代表ゴールデンバインソンへと主役の座がかわ

日本の「巳来」ミ

(腹立つ) こともあり、竜(留) 飲を下げる(ことが)で(きま) せんでした」と反省。  
近くの天王寺動物園の高橋雅之園長(ま)は「来年は大蛇(大丈夫)です! ハッピ(な)な(こと)が蛇(へ)ピ(ローテーション)になり(ます)よ(う)に」と、来年の抱負をえとにちなんだタジャレ(交)じりに披露した。



「えとにちなんだ本物の動物同士が引き継ぎをするのが恒例。」と話す青野文昭さん(右)。仙台市在住の美術家、青野文昭さん(右)が東日本大震災の津波被災地で集めた廃材を使いアート作品を制作している。テーマは「再生」。「被災地の作家として、震災の記憶を世界に発信したい」と意気込む。

波で被災。震災翌月に訪ねた際、がれきの中から店の床材を見つけた。懐かしさが込み上げてきて、拾って帰り、テーマと組み合わせて作品に仕上げた。  
その後も津波ではがれた道路のアスファルトをテーブルに組み込んだり、廃船と家具を組み合わせたたりしたユニークな作品を発表。「最初は震災と作品を結び付けたくなかったが、だんだん意識が変わった」と話す。  
震災がれきの作品づくりで考えるのは、奪われたい生活、がれきが作品の中で再生し、生きがれるようにと願う。 「平穩を表現したい」

トモダチ作戦 NYで  
在住邦人ハリケーン復旧手助け

【ニューヨーク＝共同】「東日本大震災後の米国の支援にお返ししたい」。ハリケーン「サンディ」が米東部に深刻な被害をもたらした直後の十一月初めから、ニューヨーク地域に住む日本人が、サンディ被災地で住宅のがれき除去のボランティアに取り組んでいる。



23日、ニューヨーク市クイーンズ区で、ハリケーンの被害に遭った民家の清掃をするため準備をする日本人ボランティアら＝共同

大震災後の米軍による「トモダチ作戦」への返礼の意味を込め、「トモダチ作戦・イン・ニューヨーク」と命名。ニューヨーク日系ライオンズクラブのメンバーが中心になり、ニューヨーク市立大ラガーディア・コミュニティカレッジ(LACCC)の教師や学生らも参加、これまで計十五回以上実施した。二十三日の日曜日、地元(の)非政府組織(NGO)「ニューヨーク

がれき除去 「今度は私たちの番」

断熱材などを工具で剥がしての呼吸は息が、次々と外に運び出す。苦しく、ゴーグルをしながら、目がかゆくなる。まの木材や空中に舞う粉じんから身を守るために、ヘルメットやマスク、防護服を着用。本大震災後(に)何(も)で(き)「日本人(の)に(東)東

震災がれき アートに再生

波で被災。震災翌月に訪ねた際、がれきの中から店の床材を見つけた。懐かしさが込み上げてきて、拾って帰り、テーマと組み合わせて作品に仕上げた。  
その後も津波ではがれた道路のアスファルトをテーブルに組み込んだり、廃船と家具を組み合わせたたりしたユニークな作品を発表。「最初は震災と作品を結び付けたくなかったが、だんだん意識が変わった」と話す。  
震災がれきの作品づくりで考えるのは、奪われたい生活、がれきが作品の中で再生し、生きがれるようにと願う。 「平穩を表現したい」

仙台の美術家「記憶を世界へ発信」



廃材を使いアート作品を制作している青野文昭さん(右)の作品。9日、仙台市青葉区で

いたというLAGCC。復興までの道のりはまだまだ長い。ライオンズクラブの三木伸夫さん(ま)は「ニューヨーク市民からは東日本大震災で大きな支援をもらった。今度は私たちがサンディ被災者を助ける番だ」と話し、可能な限り支援活動を続けていく考えだ。